

和泉式部の対詠歌における反復表現

古 谷 実 穂

一 先行研究・問題提起

和泉式部は、平安時代中期の女流歌人である。和泉式部の和歌は、『紫式部日記』中の「口にいと歌の詠まるるなめり」という評に基づく即興歌人的な受容が長らく支配的であり、一般には、「情熱的な歌人」「愛欲の歌人」などと称されてきた。

彼女の和歌には、類似する語句や音を繰り返す反復表現が多くみられる。統計的調査によつて、その用例数は他の私家集や八代集に比べて多いことが確認されており、特異的ともいえるその表現技法についてしばしば論じられてきた。

石田知子氏「和泉式部の歌に見られる表現上の特色」（『実践文学』第二十号、一九六三年十二月）は、同語句を繰り返す表現技法を「重語表現」と呼び、そこには和泉式部の独自性がみられると主張する。

和泉式部の重語表現は、それが、抑制しようとする意志の下からあふれ出てきた真の純粹な感動表現であることに特徴があり、他の歌人達が意識した戯れ的な気持はなかつたものと思われる。一つ一つの表現が、皆和泉式部の心に感受された象徴の

正直な表出であり、和泉式部の心の中に、自ら創造された表現である。

石田氏によれば、重語表現の表現性の問題は、歌人としての意識や歌作態度に帰着するという。そして、型に囚われず自由に歌を詠んだ和泉式部は、歌人としての自覚を持ち、調和や韻律を重んじながら感動を一般化させて詠んだ赤染衛門や、機知的な技巧として重語表現を用いた伊勢大輔ら同時代の歌人とは対照的であると指摘する。

また、岸本好子氏「和泉式部の歌について―重語表現を中心に―」（『学大國文』第十四号、一九七一年三月）は、反復表現の文学的効果を十項目挙げたうえで、次のように論じている。

これらはすべて、一興ある歌を意識して詠む、歌の姿を重んじるといふよりは、内面の要求のままに詠った彼女の歌に対する姿勢、歌人としての態度に帰結する。（中略）彼女の歌が持っているこの強さと弱さ、奔放と沈潜、華麗と憂愁とは、重語表現にも具体的な現われを見せているのであり、何かにつけてその心情を表わす任務をになつたようである。

このように、和泉式部歌における反復表現は、抒情を形成するた

めの独自の表現技法であると捉えられてきた。そして、他の歌人たちは異なり、和泉式部には、古今的な技巧や伝統を重んじたり、一興ある歌を詠もうとする意識はなかったという理解が主流であった。

ところが、稲田利徳氏「和泉式部の和歌表現の系譜」(論集 和泉式部(和歌文学の世界 第十二集)、笠間書院、一九八八年)は、石田氏や岸木氏が強調したような和泉式部歌の独自性を否定する立場から、次のように論じた。

冒頭にも引用したように和泉式部の和歌は、自由奔放な用語を駆使した、独自の歌風との評価がなされている。けれどもその独自性は、決して式部自身の全くの創造によるものではなく、三代集をはじめとする伝統的な和歌の表現を摂取しながら展開されたものであろう。ここではそういった観点から、式部の和歌に類出する、広い意味での反復表現に着目し、その淵源を在原業平などに求め、また、好忠の歌の享受に際しても、反復表現を使用することで、式部なりの変容を加えていることなどを、具体的な事例に即しながら言及してみた。

稲田氏は、反復表現を和泉式部歌の大きな特徴であるとし、たうえで、それが古歌や先達歌人の影響を受けて、彼女なりの展開を行ったものであると指摘する。稲田説以降は、業平歌受容と、反復表現の効果や使用時の意識について考察する柴村抄織氏「和泉式部の反復表現」(鎌倉女子大学紀要』第八号、二〇〇一年三月)のような、稲田氏の主張に沿った、和泉式部の古今的表現の受容を認める研究が後に続いた。また、近年の研究では、久保木寿子氏「和泉式部和歌の表現」(和泉式部の方法試論、新典社、二〇一〇年)が、「日

次歌群」における諧謔性と、素材源としての『後撰和歌集』雑四歌の存在を指摘している。このように、和泉式部による古今的な和歌表現の摂取は新たな定説となり、研究史においては、即興歌人的な捉え方が改められてきた。

しかし、ここでひとつ問題として取り上げたいのは、和泉式部の和歌研究のほとんどが、数多くの恋歌や、親王との恋愛を綴る『和泉式部日記』、恋人や娘に先立たれるという不運な境遇や、各地に残る伝説などによって作り上げられた和泉式部像に、今なお囚われ続けているということである。そして、彼女にとつて和歌を詠むことは、感動を表出したり、内に秘めた苦悩や孤独な心情を吐露する行為であつて、反復表現もそれに伴うものであるとする見方が、共通して先行研究の根幹にあるように思われる。反復表現の効果については複数の研究で言及されてきたが、どれもこの見方に沿ったものばかりである。例えば、稲田氏は前掲論文のなかで、和泉式部の反復表現の効果について、次のように述べている。

反復表現は、和歌にある種のリズムを付与する。そのリズムも、式部の歌の場合は単に軽快な方向に傾斜するのではなく、(中略)苦悩を払拭するために被いをする、激しい動作のイメージ喚起力(中略)、放胆な意志力の強調など、内面に鬱積するものを自己自身や他人に激しく訴えかけるのに有効に作用している。いわば、式部の和歌における反復表現は、彼女の内に秘めた重々しい苦悩や強烈な情念と緊密に切り結んだものであり、それがかかる表現に自から横溢したものと認められる。

和歌の解釈において、作者の思想や背景から手掛かりを掴もうとすることは、内容をより深く理解するために有効な手段だといえ

る。しかしその一方で、歌に詠まれた内容以上のことを深読みしすぎてしまう可能性も否定できない。そこで、本稿では、和泉式部伝の諸資料とは切り離し、家集の歌と詞書のみで解釈を行うことにする。また、歌合のような公の場にあまり姿を見せない和泉式部は、日常生活における贈答において、特にその独自性が磨かれたと考えられることから、特定の相手に対して贈った歌、すなわち対詠歌に対象を絞って考察を試みる。

本稿では、和泉式部の対詠歌における反復表現がもたらす効果について再考するとともに、贈答という歌を介したコミュニケーションの中で、彼女が反復表現を用いた意図や目的について検討していきたい。

二 研究の対象と分類

『和泉式部集』は、五種の異本(和泉式部(正)集、和泉式部統集、宸翰本和泉式部集、松井本和泉式部集、雑種本和泉式部集)の総称である。正集は、さらに榊原家本と村田春海自筆本に分けられ、注釈書の多くは前者を底本としている。元々は正統一体であったとされ、それぞれ自撰とみられる数個の歌群を持つ。両集で和泉式部の和歌の大半を網羅するが、すべてではない。宸翰本と松井本は、ともに勅撰集などからの採録本である。

本稿を執筆するにあたって、本文や歌番号はすべて青木賜鶴子『和泉式部集／和泉式部統集』(和歌文学大系53、明治書院、二〇二四年、以下『和歌文学大系』と略記)に従った。その底本は、榊原家本『和泉式部集』『和泉式部統集』(榊原家所蔵・公益財団法人旧

高田藩和親会管理「榊原家史料」榊原本私家集のうち『和泉式部集 上・下』及び『和泉式部集 統集』)である。歌数は、正集が八九三首、統集が六四七首であり、ともに重複して現れる歌を含む。清水文雄校注『和泉式部集・和泉式部統集』(岩波書店、一九八三年、以下『岩波文庫』と略記)解説内の指摘をふまえて、各集の内部で重複している歌を重出歌、相互間で重複している歌を重複歌と呼ぶことにする。

また、歌の解釈には、『和歌文学大系』『岩波文庫』に加え、佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全釈 正集篇』(東寶書房、一九五九年、以下『全釈』と略記)を参照した。

本研究の対象とする和歌は、次のような手順で絞り込んだ。まず、『和泉式部集』『和泉式部統集』における和泉式部歌のうち、反復表現を含み、詠歌事情の分かる詞書が付された歌を調べたところ、一四〇首見つかった。そのうち、特定の相手に向けて詠まれたと考えられる対詠歌は九六首あり、さらに、反復表現が強く表れているものに絞ったところ、五九首となった。ただし、重出歌がある場合は歌番号の早いものを、重複歌がある場合は『和泉式部集』に載っているもののみを数に入れていく。

次にこれら五九首を、①先行歌の影響を受けたと考えられるもの・類歌のあるもの、②和泉式部の独自性が表れていると考えられるもの、③その他という三つのグループに分類した。

①先行歌の影響を受けたと考えられるもの・類歌のあるもの

くらきよりくらき道にぞ入ぬべきはるかに照らせ山の端の月
もの思へば我か人の心にもこれとこれとぞしるく見えけれ
散りにきといひてややまん山吹の折枯らしたる枝はなしやは

かくやはと思ふくぞ消えなまし今日までたへぬ命せせば
いかにせんいかにかすべき世間をそむけば悲しすめばすみうし
白浪のよるにはなびくなびき藻のなびかじと思我ならなくに
別行心を思へ我身をも人のうへをもしる人ぞしる

淀わたり雨にはいとゞ真孤草まことにそれをねになかれにし
あさましや寝ぬとも人は見えけりとゆめとも夢に人に語るな
あぢきなし我ときるべき袈裟の緒の結ばれたるとけばとけなん
いくつづついくつ重ねてたのまましかりのこの世の人の心を
詠むれば思ひしらるゝ世間のうきもあはれもしる人ぞしる
頼めてもはかなくのみぞ思ほゆるいつをいつともしらぬ命を
いたづらに物をぞ思ふまつほどの命もしらずけふやくと
まこも草まことに我は思へどもさも浅ましき淀の沢水

さまぐくに神をぞいのるさし櫛のさしはなるゝが心ほそさに
さてのみはやまじと思へ枝をさへ折り枯らしたる八重の山吹
天兒につくともつきじうき事はしなの風ぞ吹もはらはむ
いづこにか立ちも隠れん隔てたる心の隈のあらばこそあらめ
忘れずや忘れずながら君をまたさてもややまん心みばさぞ
潮のまに見えぬものゝありけりと海人のあまたに見せじとぞ思
とことはにあはれくはつくすとも心にかなふものか命は
うきながらながらふるだにある物をなにかの世にしふもとゞめむ

②和泉式部の独自性が表れていると考えられるもの

秋深きあはれをしらばしらざらん人もこゝをぞ尋ねきて見ん
こゝろみよ君が心も心みんいざ都へときてさそひみよ
彦星は思ひもすらん中々に秋は昨日のなからまししかば
君は君我は我とも隔ねば心々にあらん物かは

雪も降雨もふりぬるこの冬は朝しものとみおきゐては見る
難波濁をれふす葦の葦のねのまだ寝ぬ人をおどるかすやは
頼むとて頼けるこそはかなければゆるまの夢のよとはしらずや
いふまゝにいきける物をいくにてもとゞむべくこそあるべかりけれ
草枕その結びめのたよりには千たびも千たびかさんとぞ思
待人はまて共みえであぢきなく待たぬ人こそまづは見えけれ
ありぬべき人もありける世間に我こそ夢と見ねばたのまね
わすれ草つゝむくことづけてしのぶる雪の音もせじとや
来てふかと思て思ひたちしまにさしくもりにし月のかよひぢ
頼むとて頼みがたきはこの世かな齋垣の松に浪はこゆとも

秋の夜もあけでやはやむ来と来なはまてかし榎のとはかりをだに
いとへともかぎりありける身にしあればあるにもあらであるをありとや
やすらはでたつにたちうき榎のとをさしも思はぬ人も有けん
あるほどのうきをみるだにうき物をつらき心はとゞめてやゆく
語らばおとらじ物を何事をいふともいふといひかはすらん
ひきかへて心のうちはなりぬとも心みならば心みてまし

まつ見てもまつぞ悲しき今はとて波こすく成ぬと思へば
ひきたらばかくつぐものをわがなかは中々帯の中にぞあらまし
はしくをとふみかくふみふみ見ればたゞ身のうきに渡す成けり
音すればとふかくと萩の葉にみゝのみとまる秋の夕暮

なれぬればはなだの帯のかへるをもかへすかとのみ思ほゆる哉
あはれく哀々とあはれくあはれいかなる人をいふらん
起きふしになぞやくといはるればたえずいらふる心地こそすれ
つゝむとは言ひにも言はで程ふればたゞ池水のためるとぞ見る
逢事よろづまさらぬ物ならば言ひには言はで思ひにぞ思

いまはしもとはばこたへむさばかりと心見けりと心見つれば
③その他

たえしころたえぬと思ひし玉のをの君によりまたをしまる、哉
かはらじといかゝたのまむ今は猶うす紫の色ときくく

おふくもたづねて来たる人ならばよそに見すぎてかへらましやは
とまれと思ふといかでしりにけむ惜しげなくく落る涙を

思はんと思ひし人と思ひしに思ひし事も思はゆる哉

なきながす涙にたへてたえぬれば縹の帯の心地こそすれ

参考にしたと思われる先行歌がある場合や、同時代の歌人の歌に
使用例がみられる場合には、①先行歌の影響を受けたと考えられる
もの・類歌のあるものに、他に類例がなく、和泉式部独自の表現だ
と思われる場合には、②和泉式部の独自性が表れていると考えられ
るものに、それぞれ分類している。③その他については、使用例は
多数あるが、使用方法が特異なものや、使用例を調査することが困
難なものを分類している。

先述した基準に従い、対象とする五九首を三つのグループに分類
したところ、①先行歌の影響を受けたと考えられるもの・類歌のあ
るものが二三首、②和泉式部の独自性が表れていると考えられるも
のが三〇首、③その他が六首となった。それぞれの割合は、①が約
三九・〇パーセント、②が約五〇・八パーセント、③が約一〇・二
パーセントであり、先行歌や類歌のあるものと、独自性が表れてい
るものには、数に大きな差はないことがわかった。

これより、反復表現を含む和泉式部の対詠歌には、先行表現の影
響を受けた歌と、独自性のある歌との間に、数の上で大きな偏りは
ないといえる。粗い調査ではあるものの、和泉式部歌のひとつの傾

向として捉えることができるだろう。先行表現の影響を受けたもの
と独自性のあるもの、そのどちらにも彼女の特徴があるとみて、そ
れぞれについて詳しく検討していく。

三 和泉式部歌の類型性

本章では、先行表現の影響を受けたと考えられるものについて、
例を挙げながら、和泉式部の詠歌の特徴を検討していく。以下掲げ
る和歌には、すべて上部に歌番号を示し、反復表現と認められる部
分には傍線を付した。いずれも、『和歌文学大系』『岩波文庫』『全
釈』のほか、『角川古語大辞典』（角川書店、一九八二年）一九九
九年）を参考にしながら、私に現代語訳を試みた。

まず最初に取り上げる歌は、「しる」という語が繰り返された次
の二首である。

大輔の命婦に、「とまる人よくをしへ」とて

459 別行心を思へ我身をも人のうへ〔を〕もしる人ぞしる

（訳）娘と別れて行く私の心中をお察しください。私のこと
をも娘の身の上をも、本当に分かってくださるのはあなた
だけなのですから。

また、人に

750 詠れば思ひしらる、世間のうきもあはれもしる人ぞしる

（訳）物思いに沈んでいられると思いが知らされる、世の中の辛さ
も情趣も、あなたこそそれをよく理解している人なのです。

459 番歌は、娘の小式部内侍を残して京を立つ和泉式部が、別の女
房に向けて、娘のことをどうぞよろしく願います、と呼びかけ

たものである。大輔の命婦とは、和泉式部と同じく中宮彰子に仕えた女房のことで、女房の中でも古株であったようだ。この歌には、私たちが母娘のことをよく知っているあなただからこそ、このようなお願いをするのですよ、という相手への深い信頼と親しみの気持ちが含まれている。一方、750番歌は、その詞書のみからは詠歌事情が分からないが、ひとつ前の749番歌が浮気心を責める男に対して切り返す歌であることをふまえると、ここでの「世間」は男女の仲を意味していると考えられる。和泉式部は、身にしみて感じるこの辛さも愛情も、それをよくご存じでいらつしやるあなたのせいですべて生まれたものなのですよ、と皮肉を込めて男に訴えているのである。

これら二首は、ほとんどの注釈書で先行歌の存在が指摘されている。元になったとされる歌は、『古今和歌集』に収められている紀友則の詠である。

梅花を折りて人に贈りける

友則

38きみならで誰にか見せむ梅花色をも香をもしる人ぞしる

(巻一・春上)

(訳) あなたでなければ誰に見せたらよいのでしょうか。梅の花の色も香りも、あなただけがその素晴らしさを理解しているのですから。

これら三首に共通してみられる特徴には、「しる」という動詞の繰り返しほかに、「も」もしくは「をも」という助詞を用いた二つの事物の並列が挙げられる。三首の和歌の構造を図式化すると、次のようになる。

【図1】「しる人ぞしる」歌の構造



右に示した【図1】では、各歌において並列されたものを四角で囲み、「も」もしくは「をも」に破線を付している。459番歌では「我身」と「人のうへ」が、750番歌では「うき」と「あはれ」が、『古今和歌集』38番歌では「色」と「香」が、それぞれ「しる」の対象になっている。そして、三首はどれも、「も」または「をも」という助詞を間に置きながら、異なる二物を並べ、そのうえで、結びの句である「しる人ぞしる」に繋げている。歌が詠まれた背景はそれぞれ異なるものの、和歌の構造に注目すると、三首が非常に類似していることは明らかである。

また、構造だけでなく、詠者の意識や和歌自体が持つメッセージにも共通性がみられる。それは、歌を贈る相手に何かに関して深い理解がある者として特別視していること、そして、それを相手に伝えようとしているということである。和泉式部は、あなただけではわかっていて、あなたこそよく理解している人だ、という思いを相手に訴えかける際に、『古今和歌集』38番歌の型に忠実にあてはめて歌を詠んでいることが推測される。同時代の歌人の歌に、同じく『古今和歌集』38番歌を参照したのであろう、「世中の花をはなとや思ふらんそのはかなさは知る人ぞしる」(『公任集』)、「きみならで誰にか見せむもみち葉のいろをも香をもしるひとぞしる」(『範永集』)の二首がみえるが、前者は二つの事物を並列しておらず、後者は

「梅花」を「もみぢ葉の」に置き換えただけで捻りが無い。和泉式部は、『古今和歌集』38番歌の型を借り、その型に忠実に従いながら、自身の歌として新たな歌を詠み出しているのである。

続いて、「ゆめ」という語の繰り返し返しが特徴的な次の歌について見ていく。

いかなる人にか

537 あさましや寝ぬとも人は見えけりとゆめども夢に人に語るな

(訳) 呆れたことよ。「あの人と寝た夢を見た」だなんて、夢語りにでも決して人におっしやらないでください。

二句の「人」は、和泉式部のことを指している。この歌は、人目を忍んで行われた逢瀬の後に、たとえそのような夢を見たとしても人に言いふらすようなことがあれば承知しないわよ、と男に対して釘を刺したものと考えられる。「いかなる人にか」という曖昧な表現の詞書にも、相手の特定を避ける徹底ぶりや、その事実を絶対に知られたくないという強い気持ちが表示されているように思われる。夢の話としてでも他言してはならないという警告と、禁止表現に呼応してそれを強調する副詞「ゆめ(努・慎)」を重ねた「ゆめとも夢に」は、そんな和泉式部の心情をうまくのせた表現になっている。

先に見た二首とは異なり、当歌ではどの注釈書にも先行歌に関する指摘はない。『全釈』は、「かういう重ね型の例は他に見ない」と、「ゆめとも夢に」という反復表現は和泉式部の他に例がないとしている。たしかに、「ゆめとも夢に」という反復表現は当歌以外に使用例がなく、この部分だけをみれば、和泉式部独自の表現のように思われる。しかし、これと非常によく似た表現の歌が、『中務集』に見出されることを指摘したい。

異人なるべし。忍ぶるに

245 うつつにはこころもこころ寝ぬる夜の夢とも夢に人に語るな

(訳) 現実には、この気持ちはもちろんのこと、共寝した夜の夢とも、決して人におっしやらないでください。

『中務集』245番歌で詠まれているのも、秘密の関係を持った男に向けた、夢語りにでも他の人には絶対に話さないで、という注意喚起である。ここでは、「こころ」という語も繰り返し返され、反復表現が印象的な歌となっている。この二首をすべて平仮名に直すと、三十一文字のうち約半分の一五文字が一致している。使用語の一致率の高さからして、偶然にここまで類似した表現の歌ができたとは考えにくく、両首の間には強い影響関係があるとみてよいだろう。中務は、延喜十二年(九一二年)頃から永祚元年(九八九年)頃まで生存したとされる女流歌人である。和泉式部が天元元年(九七八年)頃に生まれたとすると、彼女が何らかの形でこの歌を知り、唱歌の参考にした可能性は十分あり得よう。つまり、「ゆめとも夢に」は和泉式部独自の表現ではなく、「しる人ぞしる」の例のように、先行歌の表現を借りたものであると考えられるのである。

ただし、和泉式部の「ゆめとも夢に」と、中務の「夢とも夢と」は、表現としては完全に一致していない。和泉式部が中務の表現に忠実に従ったとすると、元々は「ゆめとも夢と」であったのを、誤写されてしまったのかもしれない。彼女の先行歌に対する姿勢を考慮すると、このような考察も可能となろう。

以上、先行歌の影響を受けたと思われる三首の分析を通して、和泉式部の詠歌の特徴について検討を行ってきた。そこには、先行歌の構造や内容を忠実に模倣しながら、改めて自分の歌として詠み直

している和泉式部の姿があった。その先行歌に忠実な姿勢からは、借用した歌に対する敬意さえ感じられる。彼女が、古今的な伝統や技巧を重んじず、自由奔放に歌を詠んだと一概にいうことはできないのである。

四 和泉式部歌の多義性

本章では、和泉式部の独自性が表れている反復表現を対象とし、同じく例を挙げながら、詠歌の特徴について詳しく検討していく。まず最初に取り上げるのは、「しる」という語が連続した次の歌である。

九月ばかりに、いとつれづれにて、人にいひやる

215 秋深きあはれをしらばしらざらん人もこ、をぞ尋ねきて見ん

(訳) 晩秋のしみじみとした情趣を理解している人ならば、私のことを知らない人だって、きつとここを訪ねて来て、庭の草花を見ることでしょう。

また、当歌には、ほとんど内容の一致する重出歌が存在する。

九月つごもり、久しう音せぬ人に

709 秋ふかきあはれをしらばしらざらん人も心ぞたづねきてみむ

709 番歌の詞書に、「久しう音せぬ人に」とあることから、和泉式部が歌を贈った相手は、長い間使りがなく、訪問の途絶えている人物であることが推測される。また、709 番歌では四句が「心ぞ」になっているが、多くの注釈書が「こ、をぞ」の誤りであろうと判断

しているのに従い、本稿でも「心ぞ」は誤写に発する異文と捉え、「こ、をぞ」を原本文とみて論を進める。

『角川古語大辞典』によると、「しる」は、「対象を支配下のものにする」「対象を意識の中のものにする」という大きく分けて二つの意味を持つ動詞である。どちらもさらに派生した意味を持ち、後者は特に、「①物事を、知覚する。感知する。意識する」「②物事が何であるか、どうであるかを、認識する」「③物事の意味・本質などを、理解する。さとる」「④考慮に入れる。頓着する。気にする」「⑤実際に経験する。見聞する」「⑥交際して親しくする。親しく付き合う」という六つの意味がある。当歌における「しらは」は、「③物事の意味・本質などを、理解する。さとる」の意味をとり、「晩秋のしみじみとした情趣を」理解しているならば」と訳すことができ、続く「しらざらん人も」は、「⑥交際して親しくする。親しく付き合う」の意味をとって、「(私と) 親しくない人も」と解釈することができる。つまり、和泉式部は、晩秋のしみじみとした情趣を理解しているのであれば、私と親しくない人だって、きつとここを訪ねて来て庭の草花を見ようから、あなたは言わずもがな来てくれますよね、と長い間訪問の途絶えている相手を巧妙に誘い出しているのである。「しらは」と「しらざらん」は、同じ「しる」という動詞を用いながら、秋の情趣を理解することと、親しく付き合うことという、異なる意味を担いながら繰り返されているといえる。

また、「しらばしらざらん」の用例は和泉式部のほかにはなく、『古今和歌集』に「しらばしるらめ」という似た表現を使った次の歌があるのみである。

504 わが恋を人しるらめやしきたへの枕のみこそ知らばしるらめ

(卷十一・恋一)

(訳) 私の恋心をあの人は知っていますでしょうか。いいえ、きつと枕だけが知っていることでしょう。

『古今和歌集』504番歌は、私のこの苦しい気持ちを知っているとすれば、それはきつと毎晩涙に濡れている枕だけでしよう、と切ない恋心を詠んだ歌である。繰り返された二つの「しる」は、どちらも、「①物事を、知覚する。感知する。意識する」という意味で使われたと考えられる。ここでは、和泉式部の歌のように、繰り返された語に意味の違いはみられない。

以上より、215番歌で用いられた反復表現は、単なる同一語の繰り返しではなく、意味の違いを理解したうえで並列になっていることがわかる。これは、和泉式部が多義語の存在を把握し、和歌に積極的に取り込んでいたことを示すひとつの例であるといえる。また、「しる」が持つ意味の幅広さを理解しているのか、歌を贈った相手を試しているようにも感じられる。彼女は、このような複数の意味を重ねた反復表現を巧みに利用して、直接的にはなく、まわりくどい形で相手を誘い出しているのである。

同じく多義性を利用した反復表現の例に、次のような歌もある。
はなだの帯の所々かへりたるを着替へて、男のおこせ
れば

統349なれぬればはなだの帯のかへるをもかへすかとのみ思ほゆる哉

(訳) 長い間使い込んだために縹色の帯が色あせたのを返してこられるなんて、私たちの関係を元に返そう(別れよう)と言うのかとばかり思われました。

この歌は、夫もしくは恋人と思われる男から色あせた帯が送られ

てきたのを受け、「かへるをもかへす」という反復表現を用いて返答したものである。『角川古語大辞典』によると、「かへる(反・履・婦・嬬)」には複数の意味があるが、ここでは、使い込まれた帯の様子を表す、「色があせる。変色する」の意味で用いられたと考えられる。また、「かへる」の他動詞「かへす(反・返・婦)」にも多くの意味があるが、文脈をふまえると、「もらったり借りたりしたものを取り返す」という意味で解釈するのがふさわしい。ただし、当歌の「かへす」が持つ意味はこれだけではない。ここでは、「もとの状態に戻す」、すなわち関係を解消するという意味がさらに重ねられていると考えられる。

そのように考えられる理由として、詞書にも歌の中にも登場する、「はなだの帯」という歌語の存在が挙げられる。「はなだの帯」とは、縹色(藍色より薄く、浅葱色より濃い青色)に染めた帯のことである。歌謡『催馬楽』『石川』の「縹の帯の中はたいれなるか(中略)中はたいれたるか」が「中や絶えたる」の意に解されたことにちなみ、男女の仲が絶えることを表す歌語として多く用いられた。和泉式部は、男が縹色の帯を送ってきたことに對し、もしや別れをほのめかしているのではないかと疑っているのである。男側にそのような意図が果たしてあったのか、彼の真意は不明だが、この時代、帯を含め男の装束を女が調えることは一般的であったようだ。『赤染衛門集』には、赤染衛門と夫・大江匡衡との帯を巡る贈答が収められている。

うらむべきことやありけん、さうすくせさせし人のひさしくおともせぬに、しくしておびにむすびつけてやりし

110結ぶともとくともなくて中たゆるはなだのおびのこひはいか

がする

かへし、あふぎなどぐしたればにや

山むすべとか解けとかおびのゆふかたをまつにあふぎの風ぞす
ずしき

又返し

112とくとまた扇の風のいそがぬにそらをわれなに結びめやなぞ
『赤染衛門集』110番歌詞書中の、波線で示した「さうすくせさせし人」とは、装束を縫わせた人、つまり、夫である大江匡衡のことを指している。赤染衛門は、装束の支度を依頼してきた夫から長らく連絡がないため、帯に歌を結び付けて送り届けたものと思われる。また、『和泉式部統集』にも、破れた帯を繕い、それに添えて贈った次のような歌がある。

人の「帯やある」と言ひたるに、中の破れたる

統220ひきたらばかくつぐものをわがなかは中々帯の中にぞあら
まし

(訳) 引っ張って切れたら、このように継ぎ合わせるものであるのに。私たちの仲はいつそ帯の中の芯のように、修復できるものであったらよかつたと思います。

このように、平安時代には、女が男のために装束を仕立て、出来上がったものを届けるという営みは日常的に行われていた。そうすると、男が帯を送ってきたことにも深い意味はなく、単に色があせたのを染め直してほしいという依頼であったと考えるのが自然ではないだろうか。それでも和泉式部は、「かへりたる」、すなわち色あせた「はなだの帯」を「かへ」してきたのは、「かへす」、つまり、私たちの関係を白紙に戻したいということなのかと、「かへる／か

へす」という語の意味を散りばめながら、男の心変わりを疑っているのである。また、和泉式部は、長い年月を共に過ごし、馴れ合いになつてしまった二人の関係や、帯のように色あせてしまった自身の美しさを嘆いているようにも受け取れる。当歌は、反復表現に使われた語の意味を読み解くことによつて、男の心変わりを疑い、嘆き、行動の裏に隠れた心理を探ろうとする和泉式部の姿が露わになるのである。

以上、独自性のある反復表現を持つ二首の分析を通して、和泉式部の多義性に対する深い理解と、詠歌における積極的な利用について指摘してきた。和泉式部歌にみられる反復表現は、単純な単語の繰り返しではなく、そこには複数の意味が重ねられていた。また、反復表現は一首に奥行きをもたらし、詠者が歌に込めた心情を色濃く浮き立たせるといふ役目を担っていることが明らかになった。和泉式部は、大和言葉が持つ意味の豊かさを実感し、文字数の限られた狭い世界を広げるための手段として、反復表現という技法を和歌に取り入れていたといえる。彼女が歌に詠もうとした心情をより忠実に解釈するためにも、繰り返し返された語が持つ意味の層を丁寧に読み解いていく必要があるといえるだろう。

五 和泉式部歌の発想過程

本章では、独自性のある反復表現を含む和泉式部歌が、どのような状況で、また、どのような過程を辿つて詠まれたのかについて、詞書と反復表現を手掛かりに考察を行う。

はじめに、「あり」という語が何度も繰り返された次の歌につい

て検討していく。

「まわりたりしかど、人のおはすと聞きしかばかへりにし」といひたる人に

767いとへどもかぎりありける身にしあればあるにもあらであるをありとや

(訳) 私は世を厭うていますが、命に定めのある身なので、生きているとも言えない状態で生きながらえているのを、あなたは「あり」と言うのですか。

当歌の詞書から、会いに来るはずだった男が、お伺いしましたが、他の方がいらつしやると聞いたので帰りました、と言ってよこしてきたことがうかがえる。この男の言う通り、和泉式部のもとに他の男が来ていたのか、また、彼が和泉式部の家を本当に訪れたのか、その真偽は不明である。ただ、男が主張するには、和泉式部の前に現れなかった理由は彼女の浮気心であり、元々会うつもりであったが、やむを得ず諦めたのだという。

このような男の主張を受けて和泉式部が贈ったのが、「あり」という語が何度も繰り返された767番歌である。ここで歌われているのは、本当は今すぐにでも死んでしまいたいけれど、命には定めがあるので、生きているとも言えない有様で生きながらえているこの私のことを、あなたは「あり」、すなわち「生きている」と言うのですか、という激しい訴えである。詞書を無視して和歌のみに目を向ければ、辛い俗世にとどまり続けている自身を嘆く歌として受け取ることになる。これでは、詞書が示す状況にそぐわず、一見、詞書と和歌が対応していないように思われる。

そこで注目したいのが、一首の中で何度も登場する「あり」とい

う語である。『角川古語大辞典』によると、「あり」には複数の意味があるが、そのうち、「生存する。生きながらえる」「〳〵の状態である。〳〵の状態が続いている」という意味を用いると、先に示したような解釈になる。そして、当歌の鑑賞においてもひとつ重要な意味が、「存在する。ある。いる」という意味である。この意味で解釈をすると、「ありとや」を、他の方がいる、と言うのか、と訳すことができ、他の男の存在を疑う相手への反論が成立することになる。つまり、当歌の結句「ありとや」の「あり」には、「生きている」という意味の「有り」と、「存在する」の「在り」の二つの意味が掛けられていると考えられる。一見、我が身の辛さを嘆く厭世的な歌にしか読めない767番歌には、実は、男の主張に対する和泉式部の反論が隠されているのである。

これはあくまで推測に過ぎないが、男はこの歌が詠まれた頃、和泉式部のもとへの訪問が途絶えがちになっていたのではないだろうか。和泉式部は、誰でもないあなたのせいでは、私は日々死んだように生きているのだと、彼の冷淡な態度を責めているようにも読み取れる。当歌には、我が身の辛さに加え、男の疑念に対する抗議、日頃のつれなさへの非難といった、複数の意が重ねられていると考えられるのである。

そして、反復表現に用いられた「あり」という語の元を辿ると、男が発した「おはす」という語に行き着く。「おはす」は、「あり」の尊敬語である。和泉式部は、男が用いた「おはす」を「あり」に変換し、一首の中で執拗に繰り返すことで、彼の発言に対する強い抗議の意を示しているのである。この767番歌は、男が発した「おはす」という語を起点に詠まれた歌であり、「おはす」を使って相手

を言い負かさうと試行錯誤した結果であろうと思われる。

次に、「つ、む」という語が繰り返された次の歌を分析し、和泉式部歌の発想過程について、さらなる検討を行う。

雪いといたう降日、「は、かる事ありてなん」といひたるに

720 わすれ草つ、む／＼とことづけてしのぶる雪の音もせじとや
(訳) 本当は私のことなんて忘れてしまいたくせに、差し障りがあると何か何とか都合のいい言い訳をなさって、音も立てないで降る雪のように、訪れもしないでいようと思うのですか。

この歌は、雪が激しく降る日に、差し障りがあつて行けません、と言ってきた男に対して和泉式部が贈った歌である。男の言う「は、かる事」が、宮仕えのことなのか、降り積もる雪を指すのか、それとも訪問を見合わせるための単なる口実なのか、ここでは特定することができない。どちらにせよ、自分ではないその他のせい、とにかく今日は会いに行けないのだと、弁解しようとする男の姿がうかがえる。

そんな男の言葉を受けて、和泉式部は、「わすれ草」という植物を題材に歌を詠んだ。「わすれ草」とは、夏に黄赤色の花を咲かせる、ユリ科の多年草である。元々は、「身につけると憂いを忘れる」という意味で和歌に詠まれていたが、平安時代になると、「人を忘れる」の意味で使われるようになった。

ここで注意したいのが、夏の「わすれ草」と、冬の「雪」は、季節が大幅にずれているということである。「わすれ草」と「雪」を取り合わせて詠んだ和歌は、飛鳥井雅親(一四一六年～一四九〇

年)の歌集『亜槐集』に収録された次の和歌のみである。

寄若草恋

986 つまばやおもふに袖をぬらすかな雪間にもゆるこひわすれ草
(巻八・恋下)

(訳) あの人を忘れるために、雪間に生えているわすれ草を摘もうとして、袖を濡らしたことよ。あの人のことなんて忘れてしまいたいの、私の恋心は激しく燃えていて、ちっとも忘れられないのです。

このように、使用例が一首しか見つからないこと、それもかなり時代が下っていることから、「わすれ草」と「雪」という二つの組み合わせは一般的ではないといえる。では、和泉式部はなぜこの二つの歌材を一首の中に詠み込んだのであろうか。その理由を解明する手掛かりが、反復表現に使われた「つ、む」という語と、当歌の発想過程にあるとみて、調査を進めていきたい。

はじめに、「つ、む」という語について見ていく。『角川古語大辞典』によると、「つ、む」には、発音が同じでありながら、意味の異なる同音異義語が存在する。具体的には、「つ、む(包・裏・慎)」「つ、む(障・恙)」「つ、む(摘)」の三つが挙げられる。

一つ目の「つ、む(包・裏・慎)」には、「物を他の物で覆い、囲む」「意味を表面に表さないようにする」という二つの意味があり、後者はさらに、「慎」の漢字をあてて、「他人の思わくなどを気にする。気がねする」という意味を表す。『岩波文庫』は、当歌の注釈において、「忘れ草」は、物に包んで身につけると憂いを忘れると信ぜられたところから、「つつむ」の枕詞となる」と解釈しているが、「つ、む」と「わすれ草」がともに詠まれた歌は当歌以外にな

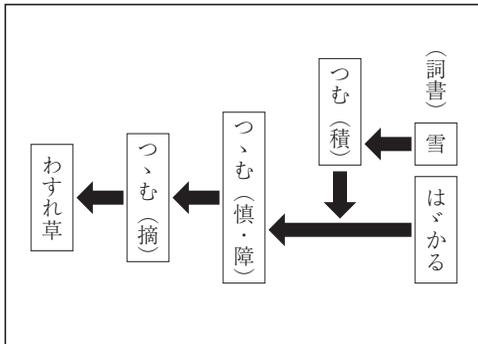
く、衣服の紐に付けることはあっても、物に包んでいたことがわかる記述は見つからなかった。これより、当歌における「つゝむ」には、「包・裹」の意味は含まれておらず、「慎」の意味で解釈すべきだと考える。

二つ目の「つゝむ(障・恙)」には、「妨げられる。邪魔される。さしつかえる。病む」という意味がある。一つ目の「つゝむ(包・裹・慎)」と同源だが、「つゝむ(慎)」が「ある対象に気がねする」という意味を持つのに対し、「その対象によって障害を受ける」という意味を持つのが特徴である。「病気になる。わずらう」という意味もあるが、病気などの災難を表す「恙」がその意味を担っていると考えられる。男を妨げたものが病気であるとは断言できないため、ここでは、もう一方の「障」を用いることにする。三つ目の「つゝむ(摘)」は、その漢字の通り、「指でちぎり取る。つむ」という意味を持つ。

ここで、当歌の詞書に戻って男の発言を振り返りたい。男は、「はゞかる事ありてなん」と、都合が悪く訪問できない旨を言いよこしてきた。彼が発した「はゞかる」という語には三つの意味があるが、文脈を考慮すると、「対象とするものに、遠慮する。気がねする。障害を意識して事を行うのを差し控える」という意味で用いられたと考えられる。また、「はゞかる事」を言い換えた、「はゞかる」の名詞形「はゞかり」には、「おそれつつしむこと。遠慮。気がね」という意味のほかに、「障害。差し障り」という意味がある。つまり、「つゝむ(慎)」と「つゝむ(障)」は、「はゞかる」「はゞかり」が表す意味と、非常によく似た意味を持つといえる。和泉式部は、これらの語の関連性を把握し、あえて「つゝむ」とい

う語を選んだと推測される。

以上をふまえ、次に、当歌の発想過程について考察していく。和泉式部は、男の言葉を受け、目の前で降っている「雪」から、その縁語である「つむ(積)」という語をまず連想した。また一方で、男の「はゞかる事ありてなん」という言葉から、「はゞかる」「はゞかり」と同じ意味を持ち、「つむ(積)」と発音の似ている「つゝむ(慎)」「つゝむ(障)」という同音異義語を思い出した。さらに、もうひとつの同音異義語「つゝむ(摘)」を連想し、そこから人を忘れるという意味を持つ「わすれ草」に辿り着いたのである。当歌の発想過程を図式化すると、次のようになる。



【図2】を見ると、詞書にある「雪」と「はゞかる」という語を出発点に、矢印の方向に向かつて言葉の連想が重ねられ、最終的に、「わすれ草」という新たな歌材が導き出されている。反復表現に用いられた「つ、む」は、音と意味の二つの要素を根拠に選ばれた語であり、発想の途中段階で生み出された語でありながら、当歌の主軸を担っているといえる。

当歌では、和泉式部の目に映る景色と、男の言葉が掛け合わされることによって引き出された「つ、む」という語が核となり、これによって新たな歌材である「わすれ草」が想起されている。このように、いわば連想ゲームを経て生まれた「わすれ草」と「雪」という二つの歌材を一首の中で無理やり結び付けたことにより、結果として、和歌にあまり詠まれることのない取り合わせになったのではないかと考える。和泉式部は、男が発した言葉を拾い上げ、それを執拗に繰り返して言い聞かせることで、都合のよい言い訳をして会いに来ようとする男の態度を非難しているのである。男からすると、それほど深く考えずに発した「はゞかる」という言葉が、自身を責めたる耳の痛い言葉となつて返つて来るとは思わなかったのではないだろうか。720番歌では、男のいい加減な言い分に対する、和泉式部の見事な切り返しが成立しているといえよう。

以上、767番歌・720番歌の分析により、和泉式部は、相手の言葉に発想の手掛かりを求め、非難や抗議の意を示す際に、反復表現を効果的に用いていたことが明らかになった。歌の中で繰り返された語は、偶然に選ばれたものではなく、相手が発した言葉から、彼女が意図的に選んだものである。和泉式部歌においては、歌の内容よりもまず核となる語が選ばれ、その語の多義性を巧みに利用しながら、

一首が作り上げられていったと推測されよう。

六 結論

本稿では、和泉式部の対詠歌にみられる反復表現に注目し、詠歌の特徴について考察を行ってきた。その結果明らかにしたのは、彼女が多義性の活用に優れた歌人であること、また、相手が発した言葉を核に歌を詠み起こし、異なる意味を重ねて反復させるという、特殊な発想過程と表現方法である。複数の意味を持った語が一首の中で印象的に繰り返されることによって、詠者である和泉式部が歌に託した心情はより鮮やかになり、相手の言動を非難し抗議するのに役立つ。彼女は、自身の思いを効果的に訴えかけるため、そして、相手を機知的に遣り込めるための有効な手段のひとつとして、反復表現を利用してたと考えられる。和泉式部歌における反復表現は、先行研究が指摘したような、苦悩や感動を演出するという効果だけでなく、歌を贈る相手を、皮肉や諧謔によって刺激する効果をも持ち合わせていたといえよう。

また、「しる」「かへる／かへす」「あり」「つ、む」のように、反復表現に使われた言葉はどれも、平易で日常的なものばかりであった。誰もが知っている身近な大和言葉の動詞を使って反復表現を生み出すところに、和泉式部の独自性が強く表れているように思われる。和泉式部は、三十一文字という制限の中で、相手の言葉尻をとらえ、多義性を利用し、平易な言葉を反復させながら、相手の発言に対し鋭く切り返しているのである。

【主要参考文献】

- ・青木賜鶴子『和泉式部集／和泉式部統集』（和歌文学大系53、明治書院、二〇二四年）
- ・清水文雄校注『和泉式部集・和泉式部統集』（岩波書店、一九八三年）
- ・佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全釈 正集篇』（東寶書房、一九五九年）
- ・石田知子「和泉式部の歌に見られる表現上の特色」（『実践文学』第二十号、一九六三年十二月）
- ・岸本良子「和泉式部の歌について―重語表現を中心に―」（『学大国文』第十四号、一九七一年三月）
- ・稲田利徳「和泉式部の和歌表現の系譜」（論集 和泉式部（和歌文学の世界 第十二集）、笠間書院、一九八八年）
- ・柴村抄織「和泉式部の反復表現」（『鎌倉女子大学紀要』第八号、二〇〇一年三月）
- ・久保木寿子「和泉式部和歌の表現」（『和泉式部の方法試論』、新典社、二〇二〇年）
- ・片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』（角川書店、一九八三年）
- ・『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）
- ・『角川古語大辞典』（角川書店、一九八二年）一九九九年）
- ・小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』（新日本古典文学大系5、岩波書店、一九八九年）
- ・『公任集』（『新編国歌大観』第三卷 私家集編1、角川書店、一九八五年）
- ・『範永集』（『新編国歌大観』第三卷 私家集編1、角川書店、一九

八五年）

・木船重昭『中務集相如集注釈』（大学堂書店、一九九二年）

・白田甚五郎校注・訳『催馬楽』（新編日本古典文学全集42、小学館、二〇〇〇年）

・『赤染衛門集』（『新編国歌大観』第三卷 私家集編1、角川書店、一九八五年）

・『亞槐集』（『新編国歌大観』第八卷 私家集編4、角川書店、一九〇年）

【付記】

本稿は、山口大学人文学部国語国文学会第三八回研究懇話会（二〇二五年二月一日開催）における口頭発表に基づく。席上ご質問ご教示くださいました方々に御礼申し上げます。

（ふるたに・みほ）